郷土の大学と連携する公立小学校の挑戦

～　「大学生と遊ぼう」に込める　新たなキャリア教育の視点　～

高松市立鶴尾小学校
鶴尾小校区活性化プロジェクトチーム　代表　田中義人

1.　主題設定の背景

香川県教育基本計画から

令和３年１０月、新たに香川県教育基本計画が策定された。基本理念が一新され、「郷土を愛し　夢と志を持って　自ら学び　歩み続ける人づくり」となった。前基本方針と比較して、キーワードは「郷土を愛する」と、生涯にわたって学び「歩み続ける」であると捉えられる。

また基本計画重点項目　４郷土を愛し、郷土を支える人材の育成　①郷土を支える教育の推進　の中で３　キャリア教育の推進　が謳われている。そこでは、「地域に根差した職業教育や就職支援の充実に努める」とある。さらに、「自己肯定感や将来への夢や希望を十分に持てない児童生徒が依然として多くいます。」と現状と課題が述べられている。

小学校においても、基本理念を実現するべく、児童が自己の適性や希望にあった進路を選択できるよう、主体的な進路選択と将来設計にかかわる指導を益々充実させることが必要であると認識される。

本校区の課題から

一方本校区では、経済、文化、教育的な環境等の様々な要因から、学ぶ意欲や基本的生活習慣、ルールやマナー等を十分に身につけることが困難な状況におかれ、課題を背負わされている児童がいる。さらに2021年３月に生徒数の減少から隣接する鶴尾中学校が閉校する中で、「愛すべき郷土」は衰退するのではないかという不安も大きい。加えて、卒業後の進学先を近隣４中学校から選択するという、児童にとって大きな進路選択の機会が小学６年生時に訪れる。その際には選択肢となる中学校の説明会や見学会を持ち、児童自身の主体的な進路選択につなげている。しかし、中には３年後、又はその数年後の高等学校や大学への進学をイメージできない家庭環境にある児童もいる。

このような状況下、郷土を愛することにつながる「ふるさと教育」については、これまでにも教科横断的にカリキュラムを編成し、人権総合学習として重点を置いて取り組んできた。これまでの実践に加えて本主題で追究するのは、職業選択の幅を広げるための進学を、家庭環境の違いを超えて全員の児童がイメージできるための、地元大学教育学部と連携するキャリア教育実践である。また同時に、実践の充実が児童の学習意欲の向上にも結びつくことを期待している。

2.　研究の仮説

本実践は、2019年12月から2022年１月までの２年２ヶ月間のものである。この期間、新型コロナウイルス感染症が拡大・収束する波の中、手段や時期、規模等を変更しながら実践継続に挑戦してきた。

次の仮説についても、実践状況から変更をせざるを得なかった経緯がある。

仮説1　児童は、大学生と実際にふれあう活動を通して「あこがれの大学生像」と進学に対するイメージをもち、将来への夢や希望を具体化することができる。

仮説2　児童のもった具体的な将来への夢や希望を、「学び続ける」ための学習意欲の向上につなげることができる。

仮説3　「大学生との交流」イベントに近隣小学校児童の参加を募ることで、中学校進学に向けてのプラス出会いの場とすることができる。また、ふるさとの小学校を自慢に思う児童を育てることができる。

※　仮説３は開始当初大きな目的であった。しかし近隣小学校からの参加児童が、極めて少なかった。また感染拡大の中、他校児童への参加依頼をひかえざるを得なかった。

3.　研究実践

主題に迫るために、３期に分けて取り組んだ香大生との交流と、体験ツアーの実践について述べる。

(1) 香川大学キッズ出前授業 in 鶴尾小 *令和元年12月*

香川大学の主催する「未来からの留学生」の講座を鶴尾小学校で実施してもらった。冬季休業日の事業であり、留守家庭学級在籍児童にも参加を呼びかけた。

２時間のコースで、７ 名の大学生と一緒になってジャグリング・手品・バルーンアートを楽しんだ。鶴尾小の34名の児童と近隣小学校の10名の児童が参加した。

年明けに第２回目を計画したが、感染症の拡大により中止することとなった。この実践が、次年度の「香大生と遊ぼう」を計画・運営する礎となった。

(2)香大生と遊ぼう！ *令和２年度*

年間を通して大学の教員や学生と連携し、大学生との遊びでの交流に加えて、勉強を教えてもらうことを香大側に依頼した。キャリア教育の視点とともに、休日における児童の学習習慣の確立をめざした。

連携事業を「香大生と遊ぼう！」とネーミングし、月に１回程度、土曜教室を開催することにした。プログラムは、大学教員の指導のもと企画された学生の主導する「イベントタイム」と、その前に１時間程度、児童が自分で持参した宿題や課題を大学生に教えてもらいながら取り組む「お勉強タイム」をセットにした。この事業を通して、学習と遊びの場で「あこがれのお兄さん、お姉さん」を身近に感じるキャリア教育の場となることをめざした。

参加人数や児童の様子、発達段階に応じて、どんな活動がより有効かを大学側と事前に打ち合わせを行い、児童が意欲的に活動できるだけでなく、大学生にも満足感と学びのある活動になるようにした。新型コロナウイルス感染症対策のため、当初予定していた回数（年間８回）はできなかったが、５回開催することができた。

○運営上の工夫

参加時にシールがもらえる児童用名札をつくり、活動中は首からかけておくことにした。そして、学生にも名札をつけてもらい、お互いに名前を呼び合うことができるように工夫した。さらに、５回参加（感染症対策に伴う中止会のため３回参加に変更）できた児童には記念品を頂けるよう大学側に依頼した。準備してもらえた大学名入りの記念品は、児童たちの参加意欲の向上と、大学生活に対するあこがれの醸成につながった。

教員の負担も考え、受付や感染症対策の消毒等はPTAへの協力を依頼した。また、PTA行事として位置づけることで、事故や怪我があった時の保険対応を可能にした。

○実践の成果

宿題や課題の分からないところを学生に教えてもらうことは、児童にとってうれしい時間のようで、普段少し難しいとすぐあきらめてしまうような児童も、学生のアドバイスを参考に問題にチャレンジする姿が見られるようになった。初めは、休日に学校へ来て勉強することに意欲がもてなかった児童が、学生との交流を機に、「あのお兄ちゃんと勉強できるからまた来たよ！」と、学習することの楽しさを感じるようになっていた。そして、友だちにも参加を呼びかけていたようで、回を重ねるごとに人数が増え、土曜日でありながら全校生の３分の１以上が参加する事業になっていった。また、学習や体験活動の合間に「何で大学に行くの？」「将来、先生になりたいのは、どうして？」など、学生に質問をする姿も見られた。その会話の中から児童は、大学生になるまでに困ったことや悩みなどもたくさん経験し、さまざまな壁にぶつかりながら、努力し続けることでその壁を乗り越え、夢の実現に向けて少しずつ歩みを進めていくことが大切だということを学んだ。

回	実施日	内　　容	参加児童数
2	7/18	ミニコンサート	32
3	8/ 1	宿題お助け隊	39
4	9/26	バルーンアート	45
5	10/24	「おはなしの国 2020」	50
6	11/ 7	おにごっこ	66 (在籍児の 44%)
※　第１・７・８回は、感染症対策のために中止			

〔令和２年度　年間実施計画と参加児童数〕

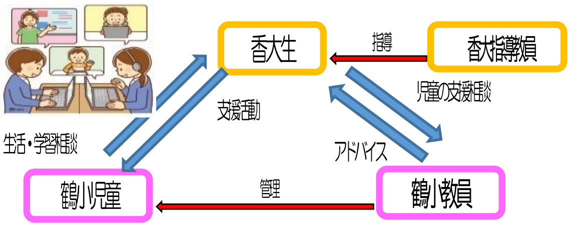
(3)オンライン香大生と遊ぼう *令和３年度*

○感染拡大による危機

令和２年度の「香大生と遊ぼう」の成果を踏まえ、３年度もぜひ継続したいと考えた。しかし、５月上旬に新型コロナウイルス対策における警戒レベルが「緊急事態対策期」に引き上げられ、これまでのような大学生との対面による交流は計画できない状況であった。「香大生と遊ぼう」の実施方法については、大きく変更せざるを得なかった。

○「Tu-Ka-（ツーカー）ネット」を計画する

感染症拡大を受けて、児童が１人１台のタブレットパソコンを活用する GIGA スクール構想が急ピッチで進められた。その趣旨にも沿って、児童と大学生さらには小学校教員をオンラインで繋げ、児童の学習支援や交流活動に加え、小学校教員から学生へのアドバイスの場づくりへチャレンジすることを計画した。Tu-Ka-（ツーカー）とは、鶴尾小頭文字の Tu と香川大学の Ka を繋げ、「気心が通じ合う間柄」を表現する「ツーカーの仲」となることを願ったネーミングである。



〔「Tu-Ka-（ツーカー）ネット」イメージ図〕

本校にとっては、価値あるキャリア教育の場として継続していきたい大学生との交流だが、持続可能な取り組みにするためには、相手側にもメリットが必要である。そこで、教育学部学生にとって普段の子どもとの関わり方を学ぶ実習の場としての本事業活用を提案した。大学生側には、感染対策により教育実習の場ですら制限される状況があり、オンラインとはいえ、直接子どもと関わる場の提供は快く受け入れられた。

○運営上の工夫

・オンライン交流の特徴から時間短縮

これまでの２時間プログラムから変更し、30 分間の「イベントタイム」と、その前 30 分間の「お勉強タイム」の１時間とした。

・効果的にオンライン交流するための人数制限

タブレットに映る画像をもとに効果的に交流するためには、参加人数の制限が必要だと考えた。そこで、対象を４～６年生に限定し、参加人数を 20 名程度とした。オンラインで繋がった電子黒板（５台）を前に４名ずつの児童の分散交流を計画した。

運営に慣れてきた第４回からは、対象を３年生まで広げた。

・鶴尾小側スタッフの確保

これまでの「イベントタイム」は、体育館や運動場にたくさんの大学生を招いて実施できたので、鶴尾小側のスタッフ（教員）は、児童管理のための数名で良かった。しかしオンライン交流は、５教室の電子黒板を前にした学習や遊びなので、スタッフが常時５人必要となった。土曜日実施の行事に多くの教員が勤務する状況は、働き方改革の視点からは問題となる。そこで、週１回ボランティアとして来校してくれている３名の大学生を、鶴尾小側スタッフとしてお願いした。また、年間の実施回数も５回とした。

・「Tu-Ka-（ツーカー）振り返りの会」の実施

実践後には毎回、大学生側と鶴尾小側の全スタッフで振り返りの時間をとった。大学生には、オンライン交流中の子どもとの関わりについて課題や感想を紹介してもらった。それに対して、鶴尾小の現職教員がアドバイスするようにした。

○実践の成果

オンラインでどんな方法で「遊ぶ」ことができるのか、大学生側にとってはアイディアを求められるところであった。ジェスチャーや数字ゲーム等、様々な工夫に、参加した児童は大いに大学生との交流を楽しんだ。中でも第３回の「オンラインピック」では、東京オリンピックで話題になったピクトグラムを取り入れたオンラインゲームを行い、高松市報でも取り上げられた。

またオンラインでの学習支援は、対面支援に比べて困難であったが、回数を重ねる中で児童が機器の操作に慣れ、問題をカメラに写しながら大学生からアドバイスをもらえる様子が見られるようになった。

前年度に比べて少ない参加人数ではあったが、大学という学びの場を、本校児童に意識づけるのには効果があったと考えている。また、大学生を代表した形で、年間を通してボランティアとして関わってくれた３人の学生の存在は大きかった。

回	実施日	内　　容	参加児童数
1	6/26	班別ゲームやクイズ	17
2	7/31	夏フェスゲーム	18
3	9/25	オンラインピック	16
4	11/27	数字謎解きゲーム	22
5	12/18	オンラインクリスマス	22

〔令和３年度　年間実施計画と参加児童数〕

(4)一高･香大体験ツアー　　*令和4年1月19日*

本校児童の中学校選択とそのための中学校見学については前で述べたが、高等学校や大学についての理解を体験的に深めるために、高松第一高等学校と香川大学の「体験ツアー」を行った。

５年生を対象として計画したが、実施日は香川県が「まん延防止等重点措置」となる 2 日前であり、児童の健康管理と感染症対策を徹底して臨んだ。

高松第一高等学校では、新校舎となって初めて迎える小学生の見学会ということで、校長先生と教頭先生が、校内施設を案内してくださった。児童は、十分に整った学習環境と真剣に授業にむかう高校生の姿に見入っていた。

以下、香川大学の体験ツアーについて運営上の工夫と成果について述べる。

〇運営上の工夫と成果

<u>・大学生をリーダーとした小グループで大学生体験</u>

キャンパス内を団体で見学するのではなく、小グループを編成し、学生に連れられての自由な見学・体験を行った。大学生と一緒に、学生食堂や図書館、テニスコート等で、自由な時間を楽しんだ。児童が事前に大学について調べた際には、食堂についての興味が大きかったが、実際にキャンパスを巡りながら、また学生と身近に接しながら、大学生活について広くイメージをもつことができた。

<u>・大学教授からの授業体験</u>

大学博物館では、当時メタセコイア展が開かれており、そこには鶴尾中学校と本校から採取されたメタセコイア等の切株が展示されていた。ここで大学教授からの話を聞く体験は、さながら「大学生の授業」であった。また、自分たちの校区からの展示物に、郷土を誇らしく思う機会にもなった。

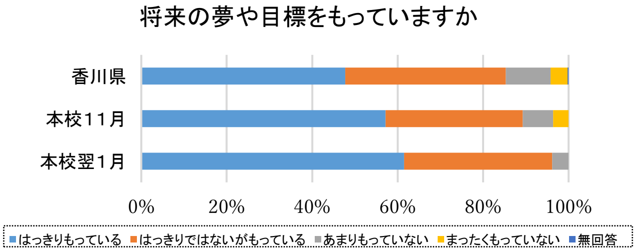
<u>・大学生による授業と振り返り</u>

キャンパス見学後には、大講義室で大学生の計画した授業を受けた。実際に講義室の机に向かって受ける授業で、大学生の学びを疑似体験した。

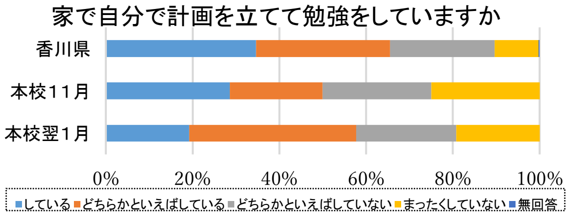
学び後の質問タイムでは、「大学に入っていいことは？」に対する学生からの「県外のたくさんの友だちができる」という答えに、自分の大学生としての姿をイメージしている児童もいた。また、「勉強は何時まで？」という質問に対する「研究室等で何時まででも」という回答については、自分がしたい勉強をいつまででもできるという大学の学習環境を感じていたようだった。

4.　成果と課題

将来への夢や希望を具体的にもつことができるという仮説１について、令和３年度実施の香川県学習状況調査質問紙調査結果から検証したい。



上のグラフは、本校５年生 28 名（令和３年度）の「将来の夢や希望をもっていますか」の質問に対する回答結果である。既に 11 月の一斉調査時から香川県結果よりも高い割合を示している。３（4）の体験ツアー10 日後に再調査した結果が「本校翌１月」のグラフであり、更に向上したことが確認できる。これらの数値は、一概に本実践の結果であるとは言えないが、県平均数値以上に、本校児童が具体的な夢や目標をもてているとわかる。



仮説２「学習意欲の向上」については、「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」の質問から検証したい。家庭での学習習慣の定着については本校で継続する課題であるが、残念ながら 11 月期においても厳しい結果が出ている。肯定的な回答が１月に僅かながら向上しているのは、「体験ツアー」効果が児童の意識向上に働いているのかもしれない。

加速度を増した社会の変化の中では、従来のように高等学校・大学への進学という進路選択にこだわるべきではない。しかし、２年余りの本事業をふりかえりながら、本校卒業生が自分のよさや可能性をもとに大勢の、そして多様な他者と学び合い、ふるさとに思いを寄せて、持続可能な社会の創り手となることを願っている。